マックス・ウェーバーにおける社会学への「転回」

――自然主義的一元論批判との関連で――

神戸大学　橋本直人

1.　問題設定

今でこそ、我々はマックス・ウェーバーを社会学の古典と位置づけて疑わない。だが、法学・経済学から学問的キャリアを開始したウェーバー自身にとって、社会学への「転回」は何を意味したのだろうか。

ウェーバーの「転回」についてはすでに数多くの先行研究がある。そしてその中では、ウェーバーの「転回」はあくまで理論内在的・漸進的な過程であったとする解釈も少なくない。だが、当時のドイツ社会学が様々な潮流の入り乱れる混沌とした状況にあったことを踏まえれば、ウェーバーにとって、「社会学」への「転回」は一種のリスキーな選択だったのではなかろうか。だとすれば、その理由は決して自明ではないのではないか。

そこで本報告では、特に「社会学」という語の用法を手がかりに、ウェーバー自身も参画した1909 年のドイツ社会学会設立前後の彼のテクストの分析を行ない、その「転回」の契機の一つを明らかにしたい。

2.　社会学への「転回」の時期

以上のような観点からウェーバーのテクストをたどると、1909 年以前のテクストには「社会学」という語の用例自体が稀であること、用いられても極めて疎遠な、距離をとった用法であることに気づく。たとえば、ウェーバー「社会学」の代表的な著作と目される『倫理』(1920 年版)での「社会学」の用例は 1 か所のみ、しかも 1905 年の原論文への加筆個所でしかない。また、『倫理』原論文発表後の論争でも、1908 年までの論文における「社会学」は、ウェーバーにとってかなり距離のある学問分野であることがうかがえる。ところが 1910 年になると、論文の主要な論点について「社会学的」という形容詞が冠せられる。つまり、ウェーバーは 1908 年から 1910 年までのわずか 2 年間で「社会学」への態度を急変させたのである。

3.　自然主義的一元論批判と「社会学」

以上の急変を背景としたときに着目されるのが、これまであまり論じられなかった書評論文「『エネルギー論的』文化理論」である。この論文で、ウェーバーは当時のドイツにおける自然主義的一元論の代表的論者であるオストヴァルトと、彼の理論的支柱であったソルヴェ派社会学に対して激烈な批判を加えている。それはつまり、当時の混沌とした社会学に対し、ウェーバーが積極的に批判と介入を始めたその端緒がこの書評論文であったということを意味しよう。

しかもこの批判は、1908 年の工場労働調査や他の研究における心理学主義・自然主義的一元論批判とも呼応している。だとすると、『客観性』論文(1905)以来のウェーバーの自然主義的一元論批判は、1909 年に至ってその主戦場を「社会学」に設定したのではないだろうか。

こうした理解は、1910 年・1912 年のドイツ社会学会でウェーバーが人種理論のプレッツを厳しく批判したこと、また『カテゴリー』(1914)で一方の法教義学、他方の心理学に対抗して自らの「社会学」を提示したこととも適合的であろう。

以上から、自然主義的一元論批判がウェーバーの「転回」の一契機であることが首肯されよう。

※　なお、本報告は拙稿「ウェーバーはなぜ『社会学』者になったのか」を元に、内容を追加・再構成したものである。発表当日はこの論文およびレジュメを配布する予定である。